自殺の後で

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自殺の後で

【Ｎコード】
Ｎ１４１６Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
小早川洋介は店の経営が上手くいかず自殺を決意した。しかしそれで辿り着いた地獄とは。生きていればいいことが必ずやって来るというお話です。

第一章

自殺の後

小早川洋介は悩み疲れていた。その細長くいかついまるで何処かの島にある顔像のような顔もやつれきっており焦燥がありありと見えていた。

「俺はどうすればいいんだ」

彼はその中でいつもうわごとのように呟いていた。

「俺は一体」

家族は長男はぐれており長女は交通事故で入院している。そして家の仕事は上手くいかず借金さえあった。おまけに訳のわからない相手にいわれのないことで訴訟を受け非常に困った状況になっていた。まさに出口のない八方塞りの状況に陥っていたのである。

悩んでもどうしようもなく困り果てていた。そうしてそんなある日。遂に何かが切れてしまった彼はふらふらとある場所に向かったのだった。

「行って来る」

「何処に行くの？」

「散歩に行って来る」

家がやっている店を出て妻にこう告げるのであった。妻にしろ今の家の有様の最中にいて非常にやつれ困った顔をしていた。

「ちょっとな」

「散歩？」

「すぐ帰るから」

うつむいて虚ろな顔での言葉であった。

「すぐな」

「すぐになのね」

「ああ」

空虚な、まさに抜け殻での言葉であった。

「だからな」
「え、ええ」
不吉な予感がしたがそれでも。今の妻にはそれを止めることができなかった。そうしてそのまま夫を見送るだけであった。彼が何をしようとしているのか感じてはいてもだ。
小早川はそのまま家を出てふらふらと駅に向かう。虚ろなまま電車に乗って向かうのは終点だった。そこは有名な崖がある場所であった。
その崖は自殺の名所である。そこでもう死ぬつもりであった。空虚な有様で電車の椅子に座りそのまま時を過ごしていた。
「これで終わるんだ」
その中でまた呟くのであった。
「これで」
生きていてもう何もないと思っていた。そのまま終点に向かう。だが座っているうちに長い間碌に眠れなかった彼は意識を遠のかせてしまい。何時しか別の世界にいた。
気付けばやたらと大きな赤い服を着たいかめしい男の前にいた。彼が誰なのかはすぐにわかった。その赤い中国風の服と髭だらけの恐ろしい顔ですぐに、であった。
「まさか貴方は」
「左様、わしが閻魔だ」
自分から名乗ってきたのであった。その左右には牛の顔をした赤い鬼と馬の顔をした青い顔の鬼がいる。彼等を見てもここが何処かわかるものだった。
「そしてここにいる理由はわかるな」
「まさか私は」
「そうだ。死んだ」
やはりこう言うのであった。
「だからここにいるのだ」
「そうですか。じゃあやっぱり」

「御前は崖から飛び降りて自殺したのだ」
閻魔はこう彼に告げるのだった。
「そうして今ここにいるのだ」
「ですよね。そうじゃないとこんな場所にはいませんからね」
何処か達観した今の小早川の言葉であった。
「やっぱり」
「それでは判決を言い渡す」
閻魔の地の底から響くような恐ろしい声が聞こえてきた。
「御前は地獄行きだ」
「えっ、私がですか！？」
小早川は地獄行きと言われて思わず声をあげてしまった。
「それはまたどうしてですか？」
「何を言っておるのだ。当然ではないか」
「そうだ。その通りだ」
閻魔の左右にそれぞれ槍を持って立って控えている牛鬼と馬鬼の言葉である。
「貴様は自殺したのだぞ」
「自殺はそれだけで罪だ」
「そうだったのですか」
「従って御前にはその罰を受けてもらう」
閻魔の言葉は厳然としたものであった。
「今からな。それでは引っ立てろ」
「はい、わかりました」
「さあ、こっちだ」
地獄の恐ろしい鬼達が彼を左右から掴んでそのうえで連行していく。彼はまずは血の池に投げ込まれた。そこに入るといきなり何と言っていいかわからない不気味極まる怪物が襲い掛かってきた。

第二章

「た、助けてくれ！」
「ひ、ひいいいいいっ！」
その怪物に亡者達が次々と捕らえられそのうえで頭から貪り食われる。小早川はそれを見て血相を変えて血の池の中を泳ぎそのうえで何とか出たのであった。
「これが血の池か」
そうしてあらためて血の池の恐ろしさを知ったのであった。
「とんでもない場所だな。長居するものじゃないよ」
こう言いながらあてもなく歩いていた。すると向こうから馬鹿でかい刀を持った鬼達が迫って来た。
「さあ、悪い奴等はここか！」
「容赦はせんぞ！」
左右にいる亡者達を切りながらそのうえで小早川の方に向かって来る。小早川はその彼等を見て血相を変えたがそれは鬼達が気付いたのと同時であった。
「待て、そこの顔の長い奴！」
「貴様も切ってやる！」
言いながら小早川の方に向かって来る。
「そこを動くな！」
「ばらばらにしてやる！」
「き、来たっ！」
小早川はその鬼達が迫るのを見てやはり血相を変えて逃げ出した。そうして二つの巨大な山の間に入った。するとそこに入ると。
今度はその山が両方から迫って来る。押し潰そうというのだ。彼は必死に走ってそのうえで間一髪難を逃れた。だがその後ろにいる亡者達は押し潰され呻き声が後ろから聞こえてきた。
「あともう少しで」

死んでいた。それはわかる。しかしその死んだ筈の亡者達がすぐに蘇るのもまた見るのだった。
山が開くとそこから押し潰された亡者達が出て来た。彼等はすぐに元の身体に戻る。そうして今度は燃え盛る嘴を持った鳥についばまれていた。
目をくり抜かれ脳をほじくり出される。そうした責め苦を受けていた。小早川の方にもその鳥達が迫り彼は捕まってしまった。そうして上から針の山の落とされてしまった。
まずは背中を貫かれる。死にそうになる程激しい痛みであった。だがそれはすぐに終わりやって来た鬼達にその針山を無理矢理歩かされるのだった。
「歩け！」
「歩かないと撃つぞ！」
その手には金棒がある。その鬼の金棒だ。彼等は実際にそれで周りの亡者達を次々と殴り飛ばしていく。殴られた亡者達は血の塊となって吹き飛ばされていく。
小早川はその彼等からも必死に逃げる。すんでのところで痛みを堪えて頂上まで登った。しかしそこからすぐにその鬼達に捕まって一番下まで投げ飛ばされる。そこからまたその痛い針の山を登らさせられるのであった。
「さあ、行け！」
「登れ！」
「そんな、最初からだなんて」
小早川は登らさせられることに思わず嘆きの声をあげた。
「折角登ったのにまただなんて」
「永遠に登るのだ」
「罪が消えるまでのな」
「自殺が罪なんて知らなかったんですよ」
彼はここで遂に泣き出してしまった。
「それなのにこれは。あんまりじゃないですか」

「あんまりだというのか？」
「これが」
「ええ、そうですよ」
泣きながら鬼達に抗議する。
「こんなことなら生きていた方がずっとましですよ」
「生きていた方がか」
「そう思うのだな」
後ろにいる鬼達はそれを聞いて述べてきた。
「その思い偽りはないな」
「そうだな」
「ええ、ありませんよ」
泣き叫ぶ言葉はそのままだった。もう針の山の上にへ垂れ込んでいる。もう一歩も進むことができない、まさにそういった有様であった。
「こんな目に逢うんならずっと生きていますよ」
「よし、その言葉確かに聞いた」
「今確かにな」
鬼達は彼のその言葉を聞いてあらためて頷くのであった。
「それではだ」
「起きるがいい」
鬼達の言葉が変わってきた。
「そして二度と馬鹿なことをしようとするな」
「いいな」
これが最後の言葉であった。小早川が目覚めるとそこは電車の中であった。何時の間にか彼がいる街の最寄の駅であった。丁度電車に乗ったその駅に着いたところであった。
「あれっ、生きてる」
まずこのことに気付いたのであった。

第三章

「生きている。嘘だろ」
そしてこう思った。しかし周りは確かに地獄ではなかった。現実の世界であった。
「地獄じゃなかったのか」
だがとりあえず起き上がった。そうして電車から出てそのまま駅も出る。家に戻ってみるといきなり女房が彼に声をかけてきたのであった。
「あっ、あんた戻って来たんだね」
「んっ、どうしたんだよ」
いつもと同じ元気のない声で驚いて慌てている調子の女房に対して問うた。
「何かあったのかよ」
「借金だけれどね」
「増えたのか？」
「それがなくなったんだよ」
こう彼に話してきたのであった。
「これが。なくなったんだよ」
「なくなった！？」
「あたしの親戚の人が肩代わりしてくれるってさ」
「親戚！？」
「ほら、言ってたじゃない」
ここで女房はさらに話すのだった。
「お母ちゃんのお兄さんの奥さんのお兄さん」
少なくともかなり遠い親戚である。
「不動産やら色々やって大金持ちだってね」
「ああ、そういえばそんな人もいたな」
「その人がさ。借金肩代わりしてくれるっていうんだよ」

「それは本当なのかい！？」
「嘘でこんなこと言いやしないよ」
女房はこう言ってそれをすぐに否定したのだった。
「そうだろう！？言ってどうなるんだよ」
「じゃあ本当にか」
「そうだよ。それにね」
しかも話はそれで終わりではないのだった。
「訴訟の件もその人が弁護士を雇ってくれてね」
「そっちはどうなったんだ？」
「訴訟していたのが騙りだって見破ってくれてそっちもなくなったんだよ」
「そうか。そっちもか」
「あと利恵子もさ」
二人の娘のことだ。その事故で入院している。
「もうすぐ退院できるよ」
「えっ、もうか！？」
彼はそれを聞いてまた驚きの声をあげた。
「もう退院できるのか」
「そうだよ。急に怪我がよくなってね」
だからだというのである。
「もうそれでね」
「そうか。利恵子もか」
「おい親父、お袋」
ここで店から二人を呼ぶ声がした。
「何そこで喋ってるんだよ」
「んっ！？稔か？」
「稔かじゃねえよ」
金髪の少年だった。年齢は十七程度であろうか。アメリカのストリートミュージシャンそのままのラフなシャツに破れたローライズのジーンズという如何にもな格好をしている。

「お客さん一杯来てるのに何処に行ってたんだよ」
「何処にって」
「学校から帰って来たら急に繁盛してて大変なんだぜ、おい」
その稔はこう父に言うのだった。
「だから早くお店に入れよ。お客さん相手にしなくてどうするんだよ」
「あいつが何で店の手伝いなんかしてるんだ？」
小早川はそのことに驚いていたのである。稔はぐれていて学校でも問題ばかり起こしていたし店の手伝いもしない。そんなどうしようもない有様だったから今こうして店の手伝いをしているのが信じられないのだ。
呆然としている彼に。また女房が告げてきた。
「心を入れ替えたのかもね」
「心をか」
「少なくともうもう今よりは真面目になったみたいだよ」
笑顔で夫に言ってきたのだった。
「ちょっとはね」
「そうか。それでも更正しだしてるんだな」
彼にとってはそれが嬉しかったのだ。息子がぐれているのも彼にとっては悩みの種だったからである。
そして彼はここで。女房に顔を向けて言うのであった。
「じゃあ俺達もな」
「そうだね。頑張ろうか」
「ああ、そうしよう」
「だから早く来いって」
息子の威勢のいい声がまた聞こえてきた。

第四章

「お客さん待ってるだろ、こんなによ」
「ああ。わかってる」
「今行くからね」
小早川も女房も笑顔で頷き自分達の店に戻っていく。彼の顔はもう店を出た時とは一変し実に明るい晴れやかなものになっていた。
その姿は鏡に映っていた。閻魔大王はその巨大な鏡を見ながらまずは満足した声を出すのであった。
「よいことだ」
顔は厳しいが声は満足したものだった。
「これでもう馬鹿なことを考えはせんだろう」
「そうですね。悩みの種が消えましたから」
「それはなくなりました」
牛鬼と馬鬼が閻魔のその言葉に応えて述べてきた。
「ですが大王」
「またどうしてあそこであの者をここに連れてきたのですか？」
彼等は今度は怪訝な顔でこう閻魔に問うのであった。
「あえて連れて来る必要も無かったと思いますが」
「ただ眠らせてそれで店に戻らせればそれで終わりだったというのに」
「話は簡単ではないのだ」
しかし閻魔はその彼等にこう言うのであった。
「そう簡単ではないのだ」
「？といいますと」
「一体」
「少なくとも自殺することがどれだけ馬鹿なことかどうかはわからんだろう」
彼が言うのはこのことだった。

「そうであろう。自殺したらどうなるかがわからなければな」
「ではまた何かあればあの男は」
「自殺しようとするというのですね」
「その通りだ。しかし自殺すればどうなるかを知っていれば」
またこのことを話す。
「それは決してしなくなるからな」
「成程、それでですか」
「だからですか」
「人界は様々なことが起こる」
閻魔は鏡を見ながら鬼達に話した。
「苦しいこともあれば楽しいこともある。それは互いに合わさっているものなのだ」
「災厄も幸福も共にある」
「そういうことですね」
「そう、まさにそれだ」
それだというのであった。
「だからだ。そう嘆くことも悲しむこともないのだ」
そしてあらためて話した。
「決してな」
「ではそれをわからせる為にもですか」
「あの男をここに連れて来たのですか」
「苦しみや災厄に悲嘆して死んでも何にもならない」
閻魔の声は強いものであった。
「そういったものもあるが何時かは終わって楽しみや幸福が来るのだからな」
「だからこそ一時の迷いで命を絶ってはならない」
「そうでしたか」
「それをわからせたかったのだ」
彼はまた言った。
「だからこそここに連れて来たのだ」

「はい、そこまで聞かせて頂いて」
「よくわかりました」
牛鬼も馬鬼も納得した顔で頷く。
「こうしたことをしていって自殺なぞをする者が減ればいいですな」
「全くです」
「完全にはなくなりはしないだろうがな」
ここで閻魔の顔は少しばかり曇ってしまった。その曇りは何処か寂しげであり悲しさもあった。閻魔にしては珍しい表情であると言えるものであった。
「自殺してはそれで終わりじゃ」
「ええ、確かに」
「その通りです」
これは言うまでもないことであった。
「それは何にもならん。しかし生きていればまたいいこともあるものじゃ」
「人間の世の中。そうしたものですね」
「ではあの者も」
「そうじゃ」
ここで閻魔はまた鏡の中にいる小早川を見た。
「もう自殺なぞ考えはすまい」
今度は温かい顔になっていた。これまた閻魔にとっては珍しい表情であったがそれでも実にいい顔であった。その顔で小早川を見守っているのであった。

自殺の後　　完

２００９・７・２５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1416i/

自殺の後で

2010年10月8日15時44分発行